
双子のジェラシー

HALTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子のジェラシー

【Nコード】

N0705I

【作者名】

HALTA

【あらすじ】

「どうして、俺に構うんだよ……！」双子の弟にコンプレックスを抱く神沢佳檻。弟を擁護する両親、懐いてくる弟から逃げるために、自立を決意するが……？

プロローグ もう、7年前の話 (前書き)

大人なキスシーンが入っております。……ぬるいやもしれませんが

(汗)

大人向けバージョンをサイトで公開しておりますので、もし宜しければ作者ページからどうぞ^^

プロローグ もう、7年前の話。

昔から弟は、俺だけに懐いていた。

弟は出来が良かったけれど俺は勉強も何も出来ない。

しかし俺が悪い点を取った時、両親に叩かれそうになると、決まって弟は俺を庇った。

両親は弟を叩けない。

それを分かっているからこそ弟は俺を庇うわけで、しかし、後になつて弟が忘れた頃、俺は倍以上叩かれた。

……それでも弟は、俺に懐いた。

俺だつて、弟の事は嫌いじゃない。

懐いてくれるのは純粹に嬉しいのだ。

けれど、何でもそつなくこなす弟を、妬んだ事がないわけがない。

……悔しかった。

言い返す事も出来ず、ただ、両親に叩かれ続けるだけだった自分が。

そして今年で、あれから7年目を迎える。

第1話 再会・どうして来るんだよ……（前書き）

若干大人なキスシーンあり。

第1話 再会…どうして来るんだよ……

「佳檻^{かおり}、迎えに来たよ」

「……っ!？」

結局は逃げ切れない。

何だかんだ言っつて、此処は父が趣味で経営しているアパートの入室だ。

俺は結局家出したのに、家族との縁を断ち切れないでいる。

「帰ろう、佳檻。お父様もお母様も、心配してる」

紗織^{よおじ}はそう言っつて、俺の方に手を伸ばした。

「……心配なんか、してるわけないだろ。それより、お前が此処に居る方が、両親が心配する」

「両親だなんて……佳檻、そんな他人行儀な態度取らないでよ」

「違う」

俺は首を横に振る。

他人行儀な態度など、取った覚えはない。

「……元々、他人だ。俺達に関わりなんてない」

「な……っ」

酷いよ、となじる事もなく、紗織は絶句した。

俺はそれに気を良くし、さあ、と言っつて紗織を部屋から出そうとする。

しかし、俺より10数cm高く、若干体格の良い紗織をそう簡単に部屋から出せるわけもなかった。

「……出て行ってくれ。お前が此処に居ると、要らぬ災難が俺にまで降りかかる」

何それ、とでも言いたげに、紗織は顔を上げる。

「……紗織。お前、昔から」

「やっつと、名前、呼んでくれたね」

「っ!？」

ふわりと、柔らかいものが唇に触れた。

至近距離で紗織の笑顔が広がる。

「どうして、佳檻。どうしてそんなに冷たくするの。俺、悪い事でもした？」

若干見下ろす様に紗織は言った。

「悪い事……の方が、まだマシだよな。お前がそうやって正当な事するからこそ、俺は困るんだよ」

「？ 佳檻の言ってる事、全然分かんない」

「分かんなくて良いよ。優等生のお前にはな」

皮肉を込めて俺は言う。

そして突き放すように、ふいと顔を背けてみせた。

「……ねえ、何、佳檻、どうしたの。俺の事誘ってるの？」

「は ……？」

ちう、と今度はあからさまな音がして、唇が吸われる。

いや、正確には、唇だけでなく……舌も、だ。

しかし予想外の出来事に俺の頭は真っ白になり、何も考えられなくなる。

「さお……っ、んっ、あっ……」

喋らないで、とでも言いたげに、紗織の舌が器用に俺のそれに絡みついてきた。

「ん、ふ……あ、あ……っ」

「ごめんね、佳檻……いじめたつもりは、ないんだけど」

突然膝の力が抜けて驚いている俺を器用に抱きかかえ、綺麗に笑ってみせる紗織。

……こいつ、手慣れたる。

そう思った瞬間、身体の熱が一か所に溜まるのと同時に、その熱が萎える様な何かを感じた。

「紗織……っ、もう、帰れっ！」

ドン、と紗織の肩を突き飛ばす。

いい加減帰ってもらわないと、俺がまずかった。

「お願いだから……っ」

「……仕方ないね。佳檻、まだ、お父様とお母様が怖いんだ」
膝を落としてうつむく俺の頭を、紗織の手が撫でる。

……そうさ、怖いんだよ。俺はまだ、彼らが怖い。

両親という認識すら嫌で、沈黙で肯定した。

「分かったよ……お父様とお母様に「佳檻を連れ戻してこい」って
言われてるんだけど……そのお父様とお母様が怖いんだったら、仕
方ないよね。俺からも言っておいてあげる」

「や……言わなくて、良い。……そのかわりにさ」

「ん？」

俺はその言葉を紡ぐために顔を上げる。

すると、そこに居た紗織の表情は、驚くほど優しかった。

「もう一人で生きていきますから、どうか、構わないで下さいって

……言っておいて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0705i/>

双子のジェラシー

2010年10月11日22時19分発行